

効果的マニュアル作成の技法：わかりやすさの追求

緊急輸血対応、マニュアルをみて一人で対応できますか

◎森 恵子¹⁾
伊勢赤十字病院¹⁾

以前は各部門または測定機器により異なった形式でのマニュアルが多かったが、医療法改正や日臨技品質保証施設認証、ISO15189 取得に関して標準作業手順書（SOP）の作成が求められ、文書形式の統一化が進んできている。SOPには測定原理からパニック値への対応に至るまで多くの情報が盛り込まれているが、新規採用や部署異動の技師に対して指導・教育するためにはSOPでは即時性のあるマニュアルとしては使いにくい。演者が新人の頃は、マニュアルなどなく、口頭で説明されながらメモを取り、手順や注意点などを自分なりにまとめ上げ検査を習得してきた。いわゆる「お手製のマニュアル」を各自が白衣のポケットに忍ばせて遂行してきた。最近の若手技師はメモを取っても見返すことがないことも多く、さらには見返したくてもどこに書いてあるのかわからない技師も見受けられ、何度も同じ内容を説明し、指導者側が不安になることもある。現在は検体到着処理、測定、結果確認および承認報告までをシステムや測定機の画面や作図を盛り込み、だれもが分かり易く対応しやすいマニュアル作りを意識している。また数年前からは経時的に習得度を評価するチェックシートも活用している。一定回数指導した後に自己と指導者が評価することで習得具合が把握でき、以後の指導の内容を充実させることができていく。これは、教育を受ける側だけでなく指導者側の育成にも役立っている。当直業務には多種多様な検査があり様々な対応が求められるが、特に輸血業務は救命を左右する状況が多く、安全かつ迅速な対応が必要となる。今回は、新人だけでなく当直者でも不安を感じることの多い輸血検査に特化し、当院の輸血検査マニュアルがどのように進化しているかを考える。また、外傷性大量出血や産科危機的出血などの超緊急輸血や異型適合輸血を迅速かつ正確に対応するための工夫を紹介する。